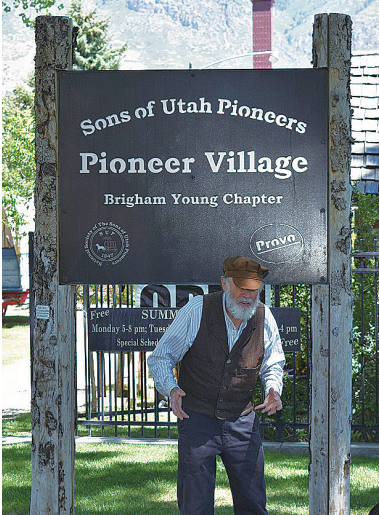


TEACHING ENGLISH NOW

英語教師のための情報誌



特集 英語教育，次の時代へ

特集

巻頭エッセイ 本心をオープンに	中村 慶	01
英語教育，次の時代へ		02
根岸雅史／竹内 理／工藤洋路／山本崇雄／巨理陽一／酒井英樹／ 鈴木 悟／日暮滋之／田中武夫／池野 修／和田朋子／今井裕之／ 三野宮春子／松沢伸二／谷口友隆／横川博一／佐藤臨太郎／ 大島希巳江／田嶋美砂子		

連載

英語教師のための基礎講座 授業マネジメントの勘どころ：「空気の教育」を目指す	田邊祐司	12
評価クリニック CAN-DO リスト，どう使う？	根岸雅史	14
授業レポート 生徒の目が輝く！ アクティブ・ラーニングの考えを取り入れた授業 (2)	枝迫香菜	16
小学校英語 Just Now 英語表現に触れる頻度を高めるカリキュラムーモジュール導入 その2... 松宮奈賀子・清水由美子	松宮奈賀子・清水由美子	19
単語の文化的意味 89 travel	森住 衛	21
平成 28・29 年度 中学校英語 文法事項・語彙 移行措置資料	編集部	22

AROUND THE WORLD 英語から見たタイ語 [2]	峰岸真琴	表紙裏
表紙写真について THE PROVO PIONEER VILLAGE	杉本 薫	表紙裏

Vol.32

SPRING 2016
SANSEIDO

タイ語の発音

タイ語学習の最初の関門は発音である。正確な発音を最初に身につけておかないと、後で矯正することは難しいし、そもそもきちんと発音できない音は聞き取れない。またタイ人の英語の発音の癖を知っておくと、少しは聞き取りやすくなるかもしれない。

子音を C で、母音を V で表すと、タイ語の音節は、C1 (C2) V (C3) と表すことができる。この丸っこは選択的、つまり必須の要素ではないことを示す。注意すべきは、C1-C2 の組合せには 12 種類しかないこと (k-r, kh-r, k-w, kh-w, k-l, kh-l, p-r, ph-r, p-l, ph-l, t-r, th-r)、音節末に子音がある場合でも子音は 1 つ (C3) しか許されないこと、しかも C3 になれる子音は極めて限られていること (-m, -n, -ŋ, -p, -t, -k, -ʔ) である。(最後の [ʔ] は「アッ」と驚く場合のような声門閉鎖音である。) タイ語の子音には、英語や日本語のような有音・無音に加え、中国語に見られるような無音・有音の対立がある。例えば /d, t, th/ の 3 つが意味の区別に用いられるのである。この無音・有音の対立のうち、特に無音無気音 /p, t, k/ は難しそうだが、実は習うにはコツがある。

英語では speak, steak, scar のように s に続く p, t, k は無気音に近く、peak, take, car のように、語頭の p, t, k は /ph, th, kh/ という有気音で発音されている。日本人が外来語としてこれらを発音する場合も同様である。前者の発音を意識化することで、語頭の無気音



東北タイでのローイクラトン (灯籠流し) のお祭りの様子

の発音が習得しやすくなるので、口に出して試してみたい。

どの言語にも音節を構成する際の共起制限が存在する。英語は音節初頭に子音連続 [s-l] は許すが [s-r] は許されない。このような音節構成上の制限は、外国語を学ぶ際に影響を及ぼすことが多い。それではタイ人が英語を話すときどうなるだろうか。

私自身の経験だが、タイのホテルのフロントで /wan din/ と言われて当惑したことがある。タイ語では /wan/ は「日」、/din/ は「土、泥」であり、修飾語は名詞の後ろに置かれるので、これがタイ語だとすると「泥の日」となり、理解できない。実は“one drink”, つまりウェルカムドリンクのサービスがある、と英語で言われたのだった。/wan/ が“one”に当たるのはわかるが、タイ語に音節初頭の /d-r/ がないために、“drink”の“r”が落ち、音節末には子音が 1 つしか許されないため、“k”も落ちてしまった、というわけである。

表紙写真 について

THE PROVO PIONEER VILLAGE

杉本 薫 Sugimoto Kaoru (東京都立両国高等学校附属中学校)

7月24日は「パイオニア・デイ (Pioneer Day)」と呼ばれ、アメリカのユタ州の人々にとって最も大切な祝日である。未開の地だったユタ州に、ブリガム・ヤングに率いられた開拓者の一団が、現在のソルトレイク市近郊にたどり着いた日を記念している。

写真のユタ州プロボ市にある“The Pioneer Village”では、公園ほどの敷地に開拓者たちが実際に生活していた家や学校、店、牛舎、馬屋、鍛冶屋や大工などの建物をそのまま移築し、当時の生活をそのま

まに再現している。ガイドをしてくれる村人役はすべてボランティアで、服装やひげも当時のままに、訪れる人たちを映画やドラマのような世界にタイムスリップさせる。雰囲気としては、「大草原の小さな家」あたりを思い出すとちょうどいいかもしれない。このように開拓者の生活を残し、後世に伝えようという施策はアメリカに多い。

一教室しかない学校では、カモメがユタ州の鳥である理由を説明していた。確かに海のないユタ州でカモメとは不思議な取り合わせである。

その昔、開拓者たちが定住を目指して、作物など何も育ちそうもない荒れ地を何とか開墾して、やっと小麦の収穫にたどり着いた時に、突然現れたイナゴの大群が彼らの畑を襲い、貴重な小麦を食い荒らしてしまう。なすすべもなく絶望していた開拓者たちを救ったのは、どこからともなく現れたカモメたちで、イナゴをことごとく食べ尽くしてくれたという。開拓者たちにとってこれはまさに天の助けで、そのエピソードから海のないユタ州でカモメが州の鳥として大切に扱われているようだ。





本心をオープンに

中村 慶 Nakamura Kei

世界 25 の国や地域……。

ここ3年で地球のさまざまな場所を飛び回って取材した数です。その膨大な取材時間の中で私が外国人とのコミュニケーションにおいて重要だと感じたこと——それは本心を隠さないということです。

アンデス山脈の5,000m付近に暮らすペルー人の家族を取材した時のことです。夫婦に子ども2人の構成でしたが、寒い上に平地の半分ぐらいの酸素量という厳しい環境にもかかわらず、ストローハットを身につけ、自給自足の暮らしをする伝統的な一家でした。そこで、お母さんが私たち日本の客人に料理を振舞いたいと言ってくれました。

ご厚意に感謝しながら待つこと1時間、「さあ、どうぞ」と言ってくれたものに私は絶句しました。それは、現地ではクイと呼ばれるモルモットの丸焼きでした。山岳民族にとって、クイは昔から重要なタンパク源でとても高価なものです。正直一切口に合いませんでしたが、精一杯のおもてなしを無下にしたくないという気持ちからか、私は笑顔を見せ、「おいしい!」と言って食べていました。

しかし、食事中お母さんの表情はだんだん曇っていきました。会話をしようとしても、彼女からの返答は一切ありません。完全に無視の状態です。結局取材の最終日までその状態が続きました。一体どうしたのか？ 理由もわからず、私は少し嫌な気持ちになりながら次の取材先へと向かいました。

次に訪れたのは、アマゾンの奥地「イキトス」という街でした。こちらは、アンデス山脈とは打って変わって、気温35度を越す熱帯雨林に囲まれた場所でした。そこで市場に赴き、再び地元の人の手料理を頂く機会がありました。「さあ、新鮮なうちにどうぞ〜!」元気がよい女将さんが持ってきてくれ

た料理に、私はまたしても絶句しました。それは「猿のスープ」でした。アマゾンでは猿は普通に食べられており、市場にも平然と並んでいます。肉を煮てスープにする事が多いといいます。「とっても柔らかく煮たからおいしいよ〜!」

自信満々の女将を前に私は何とか食べようと努力しました。しかし、これはさすがに無理でした。私は正直に「すみません、これは口に合いません」と伝えました。怒られるかなと思った瞬間、彼女は笑顔で「それは仕方ないね! あんたは外国人なんだから。正直に気持ちを伝えてくれてありがとう!」と予想外の返事をもらいました。

私はそこでハツとなりました。アンデスのお母さんがなぜ怒っていたのか、ようやく理解できたのです。私たち日本人は相手を傷つけまいと、本心を言わないことが多々あります。しかし、多くの外国人は本音を教えてくれないことをもっとも嫌います。「友人なのになぜ本音を言わないんだ!」「おいしいと嘘をついて食べていた方が余計悲しい。」それがあの時アンデスのお母さんが感じていたことだと思っています。以来、私は外国人と接する時には包み隠さず自分の意見を言うように心がけています。

もちろん英語力は大事です。しかし、英語での会話能力を超えたコミュニケーション力を培うために必要なことは、いかに本音を相手に伝えるかが鍵である、と信じています。

なかむら けい

TVディレクター。長野県出身。高崎市立高崎経済大学卒。フジテレビの「世界行ってみたらホントはこんなトコだった!」、テレビ東京「世界!ニッポン行きたい人グランプリ」など数多くの海外情報ドキュメンタリー番組を手がけ、世界各地を訪問。

英語教育, 次の時代へ

今年の4月から、改訂版の教科書の使用が開始されます。また、次の学習指導要領についての議論も始まっています。

これから英語教育はどうなっていくのか、またそのために現場で考え、実践すべきことはどのようなものか、英語教育に携わる19名の先生方にさまざまな角度からご意見をいただきました。

キーワード：

英語教育の課題／大学入試改革／CAN-DO リスト／アクティブ・ラーニング／
協同（協働）学習／ICT／語彙・文法／言語活動／海外の状況／英語で授業／
外国語運用能力の育成／グローバル化／題材

キーワードで語るこれからの英語教育の課題 根岸雅史 Negishi Masashi (東京外国語大学)

本稿では、今後着目のキーワードに焦点を当てて、これからの英語教育の課題を展望する。

まず、口頭の「やりとり」である。「やりとり」とは、CEFRではSpoken Interactionと呼ばれ、「会話」を表す。これまで「話すこと」の指導では、スピーチやプレゼンの指導が中心だったかもしれないが、これらはCEFRではSpoken Production（発表）として、「やりとり」と区別されている。もし「話すこと」の指導が「発表」だけで、「やりとり」がないとしたら、それは偏った指導ということになる。

この「やりとり」は、「即興」である。これは、準備して行うことの多い「発表」と大きく異なる点だ。決まり文句を覚えたり、文型練習をしたりということは、「やりとり」の指導でも必要だろう。しかし、最終的には、「やりとり」は「即興」でできるようにならなければならない。そして、その「やりとり」を継続して行うには、生徒は自分で話す内容を考えながら話し続けなければならない。したがって、その指導にあたっては、あらかじめ原稿を準備して話すのではなく、その場で考えて即興で話すなどの言語活動を繰り

返し行うことが重要である。

もう1つのキーワードは、「概要と要点」だ。英語力調査で課題として取り上げられているが、現行学習指導要領には明確な定義はない。様々な調査で、「概要と要点」の指導は行っているという認識が教師にも生徒にもあるが、英語力調査の結果を見れば、「概要と要点」をとらえる力が身につけていないことは明らかだ。問題は、「概要と要点」が、「大雑把な理解」程度としかとらえられていない点にある。

では、「概要と要点」の違いは、何であろうか。まず、「概要」は、特定の情報の取得ではなく、文章全体や話全体の流れを表したものだ。これに対して、「要点」は「点」である。さらに、この「要点」は、「話し手が伝えようとする点」と「聞き手として知りたい点」に分けられる。ただ、同じ「要点」でも、前者の方が後者よりはるかに難易度は高い。

「読むこと」や「聞くこと」という活動をただ大雑把に捉えるのではなく、このような枠組みを持って評価を考えることで、授業の活動を考えるヒントになることだろう。

大学入試改革と英語教育

2020年(平成32年)は、教育に関わる様々な改革が導入される節目の年といえるだろう。大学入試改革もこの年の実施を目指して急ピッチで議論が進んでおり、今の中学1年生が、新しいタイプの大学入試を初めて受ける学年となる予定だ。

制度面での骨子は、いわゆる「センター入試」を廃止し、代わりに「高等学校基礎学力テスト」と「大学入学希望者学力評価テスト」(いずれも仮称)を導入するというものである。(a)一発勝負ではなく、複数回の受験チャンスを与える、(b)学習指導要領で示されている「思考」「判断」「表現」、つまり知識の活用を問う問題を出题する、(c)科目を併せた「合科型」や、知識・技能を総動員して解答する「総合型」の問題を導入する、(d)Tablet PCを使ったコンピュータ適応型テストも考慮に入れ、(e)2次試験では面接や筆記、プロジェクトを実施しての総合的な評価を想定する、など様々な改革が検討されている。

英語教育に関しては、4技能直接測定型の試験導

竹内 理 Takeuchi Osamu (関西大学)

入が大きなポイントとなることは間違いないだろう。4技能とその統合的運用を、現実的な場面により近い形式で測定するテストは、作成・実施が難しいこともあり、大学入試ではあまり用いられてこなかった。しかし今回は、困難さを外部検定試験(英検、TEAP、TOEFL、TOEIC、IELTS等)の活用で解決しようとする方向性までが打ち出されており、私立大学の入試でも、この方向を先取り実施する動きが急速に進んでいる。従来、中等教育段階での英語教育が変わらないのは「大学英語入試に原因がある」といわれてきた。今回の改革に伴い、この理由付けは通用しにくくなる。それどころか、大学入試を起点に高等学校、中学校、そして小学校の英語教育までが、一貫した目標(コミュニケーション・ツールとしての英語活用力強化)のもとに切れ目なく接続されていくことになる。いわば、大学入試起点のバックワード・デザインが実施されようとしていることに、我々は意識を向ける必要があるだろう。

CAN-DO リスト～作成から活用へ～

「CAN-DO リスト」とは、「英語でできること」を1つずつ記述したもの(ディスクリプタ)を、技能ごとや能力ごとにリスト化したものを指す。CAN-DO リストは今では英語教育のキーワードの1つになったと言える。その背景には、2011年6月の「中・高等学校は、学習到達目標を『CAN-DO リスト』の形で設定する」という提言がある。これを受けて、地域や学校ごとに独自のCAN-DO リストが作成されてきており、すでにリストが完成している学校もある。

ただし、CAN-DO リストは作成して終わりというわけではない。それを授業や評価の場面で活用しなければ作成が徒労に終わってしまう。例えば、「地域や学校紹介のプレゼンテーションができる」というディスクリプタを取り上げるとする。ここから「自分の街の美術館の紹介をする」という言語活動を作成し、まずは紹介に必要な語彙や文法事項を学び、次に紹介の原稿を書かせ、そして、原稿を添削したものを暗記させて、プレゼンテーションを行えば、

工藤洋路 Kudo Yoji (玉川大学)

CAN-DO を指導において活用したと言える。そして、ステップを踏んだこの指導のおかげで、最後の発表も概ね成功することが期待される。

しかし、この段階で、このCAN-DO を達成したと判断するのは早合点である。この活動では練習をたくさん行った上で、先生からの支援を多く受けた直後での「成功」である。したがって、自力でこの活動を達成できるかどうかの評価にはならない。また、1回の言語活動だけは能力を上げるのには不十分である。元のディスクリプタでは「地域や学校」とあるところを、活動では「自分の町の美術館」に絞っている。つまり、1つのCAN-DO は、いくつかの類似した言語活動を徐々に自力で行うことで達成できるものでなければならない。この点を留意した上で、CAN-DO リストを作成し、それを上記の例のように活用しながら、そして、必要であれば、作成の段階に戻り、ディスクリプタに修正を入れるなどして、CAN-DO リストを日々更新していくことが大切である。

自立につながるアクティブ・ラーニング

山本崇雄 Yamamoto Takao (東京都立両国高等学校)

高大接続の改革の一環で、大学入試が大きく変わろうとしています。大学入試が変われば、授業が変わる。昔から言われてきたことです。では、大学入試が変わらなければ、授業は変わらないのでしょうか。

大学入試が変わらなくても、確実に変わっていくものがあります。それは、社会の変化です。多様化、国際化、情報化への変化の波は加速し、これまでの社会の常識を壊し始めています。

入試が変わってから授業を改善するのでは、社会の変化に対応できません。激変する社会に出ていく子どもたちの将来を考えたとき、これまで以上に生徒を自立させ、生きる力を身につけさせる観点が大切になってきます。

より国際化する社会で自立した人材を育てる観点からは、英語教育の果たす役割は大きいと言えます。英語教育を通して、将来、生徒が困難にぶつかったときに、英語を手段として、困難を乗り越える力を

身につけさせることは英語教育の大きな使命です。

自立を育てるためには教師の役割の変化も重要です。「丁寧に教え、間違えさせない指導」から「Try & Errorを繰り返し、自力で解決法を見つけさせる指導」への転換が求められます。それには、アクティブ・ラーニングで能動的に様々な学び方を身につけさせることが有効です。

学び方の選択肢を増やすことができた生徒は、目標に応じて、学び方を選び、解決方法につなげることができるようになります。これが「自立した学習者の育成」の意味するところです。

したがって、教科書の役割も、教師が丁寧に教えることを前提とした構成から、生徒自身で課題を発見し、解決していく構成への変化が求められます。

アクティブ・ラーニングなどの有効な手段を使い、教科書を能動的に学べる生徒を育て、将来英語を使って社会に貢献できる人材育成へとつなげていくことが我々教師に求められているのです。

英語教育としての協同学習：実質化と課題

亘理陽一 Watari Yoichi (静岡大学)

協同(働)学習において重要なのは、目標・役割分担の明確化と協同を要する課題の設定です。具体的な目標と役割が生徒に理解・共有されていて、その達成のためお互いのインタラクションや協同作業が欠かせないと生徒が実感できるような課題があって初めて真価を発揮するということです。何のためにやるのかよくわからないこと、ひとりのできるようなことで協力し合おうと思わないのはごく自然なことでしょう。機械的に分割しただけの「ジグソー」では何も生まれません。形だけの「協同」、協同学習のための協同学習ならやらないほうがマシです。

互いの信頼関係は協同学習の前提とされますが、一緒に何かに取り組むことを通じて互いを深く知るようになるわけですから、どのような環境であれ、手の届く「協同」から始めることが大切でしょう。一方で、関係形成・集団づくりを直接の目的とした協同学習には私は懐疑的です。互いを認め合えるような関係は、あくまで意味のある課題を通じた英語

使用・学習の結果についてくるものであって、それ自体を目的とするのは息苦しい気がします。

「協同」の範囲・形態は、クラスを超えて、もっと柔軟であって良いと思います。学年・学校を超えて先輩や後輩と交流したり、留学生に地域を案内したりと、多様な機会が多様な英語の学びを生みます。他方、常に課題となるのは、協同学習から一人ひとりが手応えを感じられるようにすることです。全体としてうまくいっているとその雰囲気に住居しがちですが、一人ひとりに「できた、わかった」という実感が伴わないと、特定の人に「ただ乗り」する状況が生まれます。実践研究として、協同の目的・対象・条件・文脈ごとに、過程と結果の両方が第三者にも見える形で、事例を蓄積・共有することが必要です。

協同学習を实らせるには複雑な準備・調整が求められる、時間もかかります。それに見合った「手応え」を得られるかどうかは、先生たちがその労を厭わず楽しめるかどうかにかかっていると言えるでしょう。

ICTの方向性

ICT (情報通信技術) が身近な存在になり、教育においても情報化が進められている。「フューチャースクール推進事業」(総務省) や「学びのイノベーション事業」(文部科学省) などの事業によりインフラ整備や授業方法研究が行われてきた。「平成 26 年度 学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」(文部科学省, 2015) によれば, 2015 年 3 月時点で, ここ 10 年間の間に校内 LAN 整備率は 50.6% から 86.4% に, 電子黒板の整備状況は 7,832 台から 90,573 台に増加した。デジタル教材の活用率も高まっている。今後, 教育における ICT の活用はますます促進されるであろう。今から 15 年ほど前に, CALL の研究者である M. Warschauer は, 本やペンを活用した言語教育について BALL (book-assisted language learning) や PALL (pen-assisted language learning) と言わないようにいわずに CALL という用語は存在しなくなると述べている。ICT を活用した教育もいずれ日常化するだろう。

酒井英樹 Sakai Hideki (信州大学)

文部科学省 (2011) は「教育の情報化ビジョン」を発表し, ICT の特徴として時間的・空間的制約を超えることや双方向性を持つことなどを挙げ, 一斉学習・個別学習・協働学習の改善・促進につながるとしている。次期学習指導要領の議論の基となる「論点整理」(中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会, 2015) の中では, ICT 等を活用することによって繰り返し学習を行うことで定着を図ること (p.53) や効果的な言語活動を行うこと (p.44) などが指摘されている。前者は習慣形成の考え方に基づいた ICT の活用であり, 後者は CLT の考え方による活用であると言える。この 2 種類の活用に限るのではなく, 他にも, インターネットによる空間を超えた同期型・非同期型の音声・文字コミュニケーションの導入や, 英語による協働学習の媒体としての活用, マルチメディアを活かした英語のインプットの増強など, 効果的な英語学習につながる指導方法を研究する必要があると考える。

デジタル教科書使用の心得

英語の 4 技能育成の柱となるのは教科書の音読だ。通常の授業のゴールの一つは, 一人でも音読できるようにすることである。自立した学習者を育てるための指導で力を発揮するのが「デジタル教科書」だ。

デジタル教科書は, 基本的に教科書内の英文・内容を, スクリーンにそのまま映し出せる。生徒は自然と顔を上げて練習することになり, 教師は生徒の口元や発話を確認しながら授業ができる。

NEW CROWN のデジタル教科書では, スクリーンに映し出された英文をクリックすると, 全て瞬時に音声化できる。その他, フラッシュカードや音と文字を一致させる機能, マスキング (語句を隠し生徒に読ませる) などの機能もある。また, 「文法のまとめ」では, 視覚的な文法説明ができ, さらに書き込み機能でアンダーラインなどを引いて強調することもできる。

このように, デジタル教科書の利点は, ①各活動の利便性を高める, ②授業をよりわかりやすくでき

鈴木 悟 Suzuki Satoru (東京都立両国高等学校附属中学校)

る, などが挙げられる。様々な活動を短時間で済ませ, その分, 言語活動の種類や時間を増やしたりできるのも魅力だ。

授業の改善や工夫をしたくても紙の教科書では難しかった点が, デジタル教科書には備わっている。言い換えれば, 前述した様々な機能のメリットを享受するには, 教師の基本指導技術が不可欠だ。

将来, 生徒がデジタル教科書を使って家庭学習をしたり, 授業中にタブレット型のパソコンを使って国外にいる人と会話練習を行ったりできるようになるだろう。しかし, どれほど優れた ICT 機器が導入される時代になっても, 「自立した学習者を育てる」[4 技能が身につく] 日々の授業改善の志は忘れてはならない。普段からしっかりと音読指導を行い, 会話の継続を目指した言語活動を積み重ねていくような指導手順・授業計画の構築が ICT 機器やデジタル教科書を有効活用することにつながる。つまり普通の授業の一步先にデジタル教科書があるのだ。

語彙選択の視点

語彙を知らなければ何も伝えられないどころか、コミュニケーションそのものが成立しない。それだけに精選された語彙を学習者に身につけさせることが大切である。語彙を選ぶ際に、まず、使用頻度の高い語彙を選択する。次に、幅広い分野で広範囲に渡って使用される語彙を選択する。また、学習者に身近で自己表現活動で使用する語彙選択が要になる。

28NCでは、教師が学習者に学んでほしいと思う語彙として、①社会で必要とされている基本的な語彙(COBUILD5の3 diamondsと、LDOCE3のS1の語)、②実用英語の観点から英検5～3級の語彙、③平成10年の学習指導要領の「別表1」などの語彙、④平成24年度版検定教科書6社の語彙、⑤学習者コーパス(中学生によるスキット・日本紹介・スピーチ・将来の夢エッセイ・冬休みの日記などから構築)をもとにワードリストを作成し、使用頻度が高く、どの分野にも使用される1,200語程度を選定している。さて、小学校ではどのような語彙を選択しているの

日基滋之 Hidai Shigeyuki (玉川大学)

だろうか。小学校学習指導要領では、語彙より表現という言葉を使用し、「外国語の音声や基本的な表現」、「児童の発達の段階を考慮した表現」、「外来語など児童が聞いたことのある表現」を提案している。また、コミュニケーションの場面や動きの例で使用される表現を提案している。教科化に伴い、理解から表現する段階まで求められることが予想される。

これらの語彙をどのように身につけるべきかについて、Nationは、noticing(単語への気づき)、retrieval(単語を記憶から呼び起こすこと)、creative (generative) use(単語を創造的(生成的)に使用すること)という一連のステップを踏むことが重要であると述べている。28NCでは、Word Bankで語彙に着目し、Practiceでその語彙を思い起こし自分や友達について話す、書く活動を通して語彙を創造的に使用する活動を用意している。語彙習得に必要なこのプロセスを、ぜひ28NCを通して身につけていってほしいと願っている。

コミュニケーションを支える文法を実感させる

これからの英語授業では、4技能をフルに活用したコミュニケーション能力の育成がさらに求められます。しかし、中でも文法が重要であることは、まったく変わりません。残念ながら、文法指導に割ける時間には限りがあり、文法指導をより効率的に行うことが必要になってきます。

文法の形や意味だけでなく、どのような場面や文脈でその文法が使われるのかを理解してはじめて、その文法をコミュニケーションの中で活用することができます。文法の使用場面と形と意味を生徒が関連付けることができるよう、文法指導をいかにシンプルにデザインできるかが今後のカギです。

文法は、メッセージをやりとりする中で、情報を正しく伝えたり、微妙なニュアンスを相手に伝えたりするための重要な役割を担っています。限られた時間であったとしても、コミュニケーションを行うために文法が役立つことを生徒に具体的に実感させるため、文法指導における導入や説明、活動におい

田中武夫 Tanaka Takeo (山梨大学)

て、使用場面や文脈を工夫することが重要です。ある文法構造を使うことで、状況や情報をよりの確かつ具体的に伝えることができたり(例:現在完了で過去から現在までの継続を表す)、話し手の態度や感情をより繊細に伝えることができたり(例:助動詞mustで切迫した義務を伝える)、談話の中で情報をより効率よく伝えることができたり(例:関係代名詞で情報を凝縮して詳しく説明する)、文法を正しく身につけていれば、感情や状況をととても豊かに効率よく表現できることを生徒たちにぜひ具体的に伝えたいものです。

そのためにも、私たち教師も日頃から自分が英語を使う際、文法によってどのようにニュアンスが異なってくるのか、どのような文脈でその文法を使うことが自然なのか、なぜあえてその文法を使い分けるのかなど、文法の使用場面に敏感になり、コミュニケーションを支える文法を生徒に実感させる楽しい指導をデザインしていきましょう。

英語リーディング指導と教科書教材の課題

池野 修 Ikeno Osamu (愛媛大学)

英語リーディング(読解)のための教材・指導には様々な点でさらなる改善が求められる。これから目指すべき方向を明確に意識しておくねらいで、容易には解決が難しいものも含めて、課題のいくつかを以下にあげてみよう。(1)長めの英文(中3だと250~300語程度)を普段から読む機会を増やす。例えば各レッスンに一度は、まとまりのある長い英文を一気に読み切る練習をする。また、「難しめの英文を少量だけ読む」だけでなく、「やさしめの英文を大量に読む」を充実させる。(2)多様なジャンル・タイプの英文(e.g. 説明文, 論説文, 物語, メール, ウェブページ)を対象にして、英文タイプに合わせた様々な読み方を鍛える。(3)より真正な(authentic)な目的のために英文を読む活動を充実させる。「なぜこの英文を読むのか」に関して、「単語・文法を学ぶため」、「リーディングのスキルを向上させるため」という目的にとどまらず、「自分にとって意味のある情報を得るため」などのねらいを持つ読みになるように

する。(4)リーディングの授業が文法・語彙説明と意味確認だけで終わったり、単なる「答え合わせ」の授業になったりしないようにする。授業形態も、順番に和訳させていくスタイル、読解発問への解答を一斉で確認していくスタイルを改善する。(5)リーディングは個人の頭の中で起こる認知プロセスかもしれないが、リーディング「活動」は個人作業だけにせず、ペアやグループで相互作用をしながらも行うように工夫する。(6)学力差に対応した読みの教材や活動を準備する——英文は同じでも、レベル別課題を準備する、足場かけとなるヒント情報のレベルを調整する、学力差を利用した学び合いを工夫するなど。(7)読みの能力の評価は、授業で扱った英文(教科書本文)ではなく、その英文を読むことを通して向上させた能力を測ることができる、別の英文(同じテーマで、単語や文法の点でもバラレルなもの)を用いて行う。これらの課題も意識しながら、リーディング指導のさらなる改善を目指したい。

「深イイ」リーディングを目指そう

和田朋子 Wada Tomoko (工学院大学)

授業中に英語を読ませていて、読む内容と生徒の距離が、どこか遠いように感じたことはないだろうか。生徒は英語を読み、内容をなんとなくは理解しているものの、それがどこか「他人事」のままで終わっている、そう感じたことはないだろうか。

次世代に求められるリーディング指導、それは生徒自らが英語と向き合い、書かれている内容に対して自問自答をし、自発的にのめり込んでいくような態度を育てる指導なのではないかと考える。28NC2, Lesson 5, USE Read「Uluru」の第1段落を見てみよう。It looks like a mountain, but it is actually a very big rock. とあるが, mountain と big rock ではどのような違いがあるだろうか。Sometimes it looks red and sometimes it looks purple. とあるが, いつ赤色でいつ紫色なのだろうか。なぜ色が変わるのか。To most of these people, Uluru is just an interesting place. とあるが, 誰にとっては just an interesting place ではないのか。

これらの内容については教科書(p.62 Second Reading や Check)でも問われているので、まずは教科書の流れの通り、一通り答えさせればよいだろう。しかし、それが終わった後に、もう一度、上述の質問をすることで、生徒たちが文章を「読む」だけでなく、「読んで、(そこに書いてあることがつまりどういうことなのかを)考える」きっかけを作ることができるのではないだろうか。そして、この「なぜ」「どうして」を考える過程が、学習している内容と自身の距離を縮め、学習を「自分の事」とさせるのではないだろうか。

「読んで考える力」つまり「批判的に読む力」を育てることは、生徒の自発的な学習力を引き出すことにつながる。昨今は「深イイ話」のようなものがもてはやされているようだが、英語を「読む」ことこそが「深くて」「おもしろい」行為であり、真の英語力の伸長につながることを生徒に実感させたい。

言語活動中心の英語授業に必要な2つのこと

今井裕之 Imai Hiroyuki (関西大学)

小学校では、コミュニケーション活動を通じて体験的に英語を学び、中・高等学校でも、英語で授業をする(生徒も英語をたくさん使う)こと、技能の統合活動を行う(日本語訳を理解確認の手段にしない)こと、パフォーマンステストを導入し産出技能を評価することが求められている現在は、コミュニケーション活動が外国語教育の「手段でも目的でもある」時代である。

従来の教師主導型の授業展開(教師指示→生徒応答→教師評価)と違い、教室を情報と情感の行き交う豊かな言語使用の場にする発想が求められる。

1) 活動のゴール, ルール, ロール

レストランの店員と客を演じるロールプレイを3人グループで演じさせるとき、どんな配役が適当か。大阪府河内長野市の研究授業では、客2人、店員1人の設定だった、客同士は相手の注文を聞いて自分の注文を変えたりする。店員は2人の注文を個別にしっかり聞く。やや遠くに調理場を設定されていた

ので、調理場に戻って2人分の配膳をする間、店員は何度も注文を繰り返し呟いていた。役割(ロール)の工夫が言語活動の質を変える。

2) エラー対応

中学校の教室で学習者がI went to shop. と発話した時、教師はどう応じるべきだろうか。

A) No, say, I went shopping.

B) Oh, you went shopping?

C) What shop did you go?

教師の応答がA)では、go ~ingの学習直後ならいざ知らず、I went to a shop. と言いたかったかもしれない学習者は混乱する。C) またはB) で会話をつなぐような、会話と指導の往還が求められる。

活動のデザインとやりとりの中での適切なフィードバックは、我々の指導技術のコアになるだろう。さらに「英語で授業」が真にインプット増になるよう、入門期音声指導、文字指導を適切に行えば、日本の英語教育は変わるかもしれない。

アクティビティを、もっとアクティブに考えよう!

三野宮 春子 Sannomiya Haruko (神戸市外国語大学)

ダヴィンチ作「最後の晚餐」に描かれた人物たちの位置や表情を13人で再現してみると、絵画を見ただけではわからない発見があるという。また、人工知能の開発研究では、生身の人間についても多くのことが明らかになっている。英語学習アクティビティも同じで、自分で試作・試用・修正を繰り返してみると、大事なことに気づくことがある。

筆者は「その場で相手と協働で意味を創っていく創造的なコミュニケーション活動」の開発に取り組む過程で、なぜ既存のアクティビティが「あらかじめ決まった答えを速く正確に再生する予定調和的な言語活動」を超えられていないか考えることになった。そして、英語教育のなかの多くの神話に気づかされた。ここで「神話」とは、検証されずに思い込まれていること、不適切な根拠に基づいて結論されたことを指す。これらを点検すれば、アクティビティの新しい可能性が見えてくるはずだ。

一例を挙げよう。一般的に「生徒は自分のことな

ら興味をもって話す」と思われている。しかし“I ate breakfast at 7 a.m. yesterday”と事実を言うとき、または聞くとき、本当にそれほどワクワクするものだろうか。筆者の開発グループは、引いたカードに従って架空の生活を“I ate breakfast at 3 p.m. yesterday”のように言ってから“because...”とその説明を考えて話すゲームを作った。このゲームを使うと、中学生も大人も夢中になって考え、聞き手からは「オ～!!」という声や笑いが自然に沸き起こる。本当の自分のことではないからこそ、自由に想像して話せるときもあるのだ。神話から解き放たれると、新しい可能性の扉が開かれる。

他にも「ヒントやおまけを与えるのが教育的配慮だ」や「事前準備の時間を十分に取るほうがいい」など、まだまだ神話はありそうだ。何ごとも、定説に縛られず、自分で試して確かめるのが一番よい。

(本稿は、2015年に全国英語教育学会で発表した内容に基づいている。)

海外の成功例に学ぶ：フィンランドの英語教育

数学・科学・読解の国際学習到達度調査 (PISA) で常に好成績をあげるフィンランドは、英語教育でも成功している。フィンランド語はウラル語族に属し英語とは大きく異なるが、フィンランドの TOEFL iBT の平均点はいつも世界の上位十傑に入る。学校の英語の授業総時数は日本の3分の2程度だと言われているのに、フィンランドの生徒や教師は自国の英語教育はうまくいっていると言う。

筆者は2011年9月にフィンランドの小・中・高の授業を参観する機会を得た。そこでいくつかの成功要因に気づいた。本稿では日本の中学校英語に相当する彼の地の小学校教科英語について述べる(フィンランドでは小3から45分授業が週2回ある)。

フィンランドの成功要因の1つは少人数学級である。小学校の学級定員は24人だが、英語の授業は半分の12人に分けて行われていた。英語専科の先生が児童一人ひとりに基礎基本を丁寧に指導していた。

成功要因の第2は教材である。教科書の判型や厚

松沢伸二 Matsuzawa Shinji (新潟大学)

さは今年から使われる NEW CROWN 同様だが、CD付きであった。一方ワークブックは日本の通常のもの3冊ぶんの厚さがあった。そこには言語材料の習得と言語技能の伸長に有効な課題が豊富に用意されていた。自律を育む学びの振り返りカードもあった。教師はデジタル版を使って教科書とワークブック「を」教える授業をしていた。日本の英語教師が作る類いの自作ワークシートは不要であった。

第3の成功要因は宿題である。ある学校での授業後の対談で、元教師が「フィンランドの学力を支えているのは宿題です」と明言した。参観した授業の多くでは教師がワークブックの課題のいくつかを宿題に指定し、次時の授業の前半に決まって宿題のチェックを行っていた。少人数なので、授業中に点検しても数分で漏れなく終了できていた。

以上のように、フィンランドは少人数、教材、宿題で成果を出していた。これからの日本の学校英語教育にも、これらの成功要因を最大限取り込みたい。

英語で授業

「授業は英語で行う」とは、授業中の教師の発話をすべて英語で行えばよいのではなく、教師が話したり、書いたりする英語が、生徒にとって英語の運用能力をつけるためのインプットやモデルとなるようにするとともに、生徒が英語でアウトプットしようとする意欲を高め、そのための課題や時間を与えるなど、英語によるコミュニケーションを授業の中心に据えることだと思います。

言語材料の導入や理解を促す場面においては、教師から積極的に teacher talk で、語りかけたいものです。それをよりよいインプットにするためには、生徒にとってその英語が理解可能であり、聞く必要性がある、あるいは聞きたいと思える内容にすることです。この点において、生徒がどのような単語や表現を知っているか、またどのような話題に興味・関心を示すかを最も理解している教師が話す英語は、最適な教材となります。さらに、教師が積極的に英語で語りかけることで、「英語を使えるようになりた

谷口友隆 Taniguchi Tomotaka (相模原市立由野台中学校)

い」と生徒は思うようになり、「自分も英語で表現してみよう」という雰囲気教室の中に生まれます。

そこで、生徒が英語で自己表現する課題や、生徒同士のコミュニケーションが行える場面を計画的に設定し、生徒が英語を主体的に使用する時間を授業の中に位置づけることが大切です。実際に英語を使用する経験や英語が通じた喜びを通じて、生徒は英語学習やコミュニケーションの楽しさを実感し、さらなる学習への動機付けにもつながります。

小学校で培った「素地」を活かし、高等学校で求められるコミュニケーション能力を生徒が身につけることを念頭に、これからの中学校の授業では、教師・生徒間、および生徒間で、英語によるコミュニケーションを体験的に学習させることが、よりいっそう求められていくことと思いますし、それを端的に表現した言葉が「授業は英語で行う」ということだと思います。教師も生徒と一緒にコミュニケーションを楽しむ。そんな授業を目指したいものです。

今求められる、「言語情報処理の自動化」の重要性

外国語運用能力の育成には、その基盤となる「知識の形成」と「運用スキルの習熟」を図ることが必要です。いかに言語処理の自動化を図るか、大雑把に言えば、「宣言的記憶」を「手続き記憶」に移行することが重要だと言えます。

例えば、人が話すときには、①発話すべきメッセージをつくる（概念化）、②そのメッセージをレキシコンの情報を参照し、文法構造や音韻構造に対応づける（形式化）、③調音し、アウトプットする、というプロセスをたどると考えられています。これらの操作を同時並行的に行うことで、流暢に話すことができるのです。母語話者にはたやすく、外国語学習者に難しいのは、②の段階です。この段階では、(1)レキシコンから語彙を検索・選択する、(2)選択された語彙に文法機能（主語、目的語など）を割り当てる、(3)統語構造を組み立てる、(4)語尾を変化させる、といったさまざまな操作が行われます。

文を理解するときにも同じことが言えるようです。

横川博一 Yokokawa Hirokazu (神戸大学)

言語研究に脳波の成分を利用した実験が行われていますが、Mike listened to Max's *orange about war. のような意味的に不適格な文に対しては N400 という成分が出現します。外国語学習者の場合にも、そうした現象が見られます。一方、Yesterday he *play a guitar. のような形態統語違反、Susan liked *Jack's about joke the man. のような句構造違反に対しては、LAN と呼ばれる早期に行われる文法判断にかかわる成分が出現するはずですが、外国語学習者では、一般に、こうした成分の出現が観察されていません。これらのことから明らかなように、語彙と文法を操作することに関わる処理が、外国語学習者には決定的に難しいのです。

「手続き記憶」に移行させるために、文法の明示的な説明に加え、①文単位で何も見ずに復唱する、②キーワードだけを手がかりに文を組み立てる、③内容理解の Q&A を生徒同士ですばやく言う、といった音声中心の活動を継続的に行うとよいでしょう。

「ハイブリッド PPP(HPPP)」で運用能力の育成を

中高の英語の授業では、伝統的に提示 (presentation)・練習 (practice)・使用 (production) の PPP アプローチが行われてきた。Presentation において目標文法項目を提示・説明し、Practice においてその文法項目についての練習を行い、最後の Production において目標文法を使ったコミュニケーション活動が行われるという流れは教科書とも整合性があり、教師としても非常にやり易い方法であるといえる。しかしながら、正確さを重視するあまり本当のコミュニケーション能力につながらない、第二言語習得の理論に反している、習った語を意図的に使えるのはその場だけである等の問題があるのも事実である。そこで、コミュニケーション・アプローチやタスク中心指導法の利点をも取り入れた、主に英語で行う「ハイブリッド PPP」を提案したい。Presentation では、目標文法を含んだ teacher-talk をインタラクティブに行い、生徒自身に文法に気づかせるようにする。この英語での帰納的指導に、日本語での簡潔な演繹的な

佐藤臨太郎 Sato Rintaro (奈良教育大学)

指導を加えてもかまわない。Practice では機械的な練習に、生徒に目標文法を使って自分自身に関連する英文を作らせ暗記し他者に伝える等の活動を加える。Production においては、最初は目標文法使用を義務付けた活動を行い、次に、自由度の高い文法項目を指定しない活動を行う。Practice では正確性を重視し、Production の第一段階の活動では正確性と流暢さ、第二段階では流暢さに重きを置くようにする。こうみると、伝統的 PPP に近く、本物のコミュニケーションとは違うのではないかと思われるかもしれない。しかしながら、実際の教育現場での伝統的 PPP では最初の 2 つの P が重視され、最後の P が省略されているケースが多いのではないだろうか。提案している HPPP では形式ではなく、内容に重きを置く最後の P を最も重視している。この HPPP は、日本の学習環境に適した、学習者に優しい、英語での授業とも親和性の高い指導法だと考えている。「温故知新」で授業を変えてみませんか！

グローバル化こそローカル化：日本を語れる国際人に

近年、学校も企業もどちらを向いてもグローバル化が推し進められる世の中となりました。日本から一步も出なくても、世界から人々が日本へやってきており、日本国内もどんどんグローバル化しています。今の中学生が社会人になるころには、日本企業でも隣の同僚が日本人であるとは限りません。日本にいても世界に飛び出しても国際社会と言われる時代、どのような英語力をつけてどのような国際人になっていくべきなのかを中学生も考えなければなりません。私たちは日本人という名の国際人になるわけですから、やはり日本の文化習慣、価値観、言語、社会などについて英語で説明できるようにならなければなりません。自分たちの言動の一つ一つ、例えばなぜ私たちは靴を脱いで家に入るのか、音を立てて麺類を食べるのか、身内の者を悪く言う（謙遜する）のか、世界の人たちにとっては不思議がいっぱいです。このような世界との違いを包み隠すのではなく、堂々と紹介する、説明する英語力が必要です。

大島希巴江 Oshima Kimie (神奈川大学)

簡単な一言や一行の翻訳ではなく、たくさんの言葉を尽くして説明すればよいのです。

では、どのような英語が日本人らしいのか。それは、発音や文法ではなく、表現に特に表れると思います。例えば「そんなの簡単だよ」は、“That’s easy.”という言い方が最もシンプルですが、英語圏には“it’s a piece of cake.”というシャレた言い方があります。この表現を覚えるのもいいですが、私たち日本人がどうしても使わなければならないということではないと思います。私たちなら“i can do it before breakfast!”を使うほうが自分らしいアイデンティティが表現できます。当然、世界の人々はこの表現をまだまだ知りませんから、この意味を説明してあげる、そういう英語力が必要です。そこから新しいコミュニケーションが生まれて、相互理解を進めるきっかけにもなります。グローバル社会だからこそ、日本のローカル文化にも強くなる、そんな国際人を目指してほしいものです。

既存の境界線を越えた言語・文化理解

多言語・多文化主義の重要性が強調される昨今、どの英語教科書においても、英語圏以外の国や地域が積極的に扱われています。このことは生徒たちの学びに「伴走」する登場人物の顔ぶれからも読み取れるでしょう。手前味噌ではありますが、このような志向はNCから始まったと言われています。1978年に発行された初版でケニアが登場して以降、従来の教科書では見られなかった題材が多数生み出されました。その背景として、「英語圏の歴史を真に理解するには、アジアやアフリカにも目を向けなければならない」という理念があったと聞いています。

それから35年余りが経過した現在、アジアやアフリカへの言及は特別なことではなくなりました。その他の地域も同様です。時には「まだ扱われていない国はどこか」という躍起な探求さえ、各教科書からは感じられるほどです。そこには生徒たちに世界の諸事情を知ってもらいたいという願いが反映されていると言えます。その反面、一編集委員として

田嶋美砂子 Tajima Misako (元星美学園中学校・高等学校)

は文化を語ることの難しさも日々痛感しています。ある事柄の記述が「X国のX文化」という固定的な見方を促進することに加担してはいないだろうかという懸念が頭をよぎるのです。

最近の社会言語学では、これまでの本質主義的な言語・文化理解を乗り越えようとする動向が見られます。それは「国・言語・文化・民族」間の関係をより流動的なものとして捉える試みです。実際、移民の多いシドニーで暮らしていると、レストランで働くタイ出身者から「日本的な」お辞儀とともに英語と日本語で挨拶され、こちらも両方を用いて注文しつつも、帰り際にはタイ語でお礼を述べるなどのやりとりがしばしば起こります。

異文化理解の一環として、「X国のX文化」を取り上げるのは大変重要なことです。それと同時に、既存の境界線を越えた言語・文化活動について学ぶ機会を提供することも、これからの外国語（英語）教育には必要なのではないのでしょうか。

授業マネジメントの勘どころ： 「空気の教育」を目指す

田邊 祐司 Tanabe Yuji (専修大学)

授業を円滑に進めるための「勘どころ」を3名のベテラン教師からお裾分けいただき、まとめてきましたが、それも今回で終了と相成りました。最終回ということで、これだけは若い先生方に伝えたいという「メッセージ」を各自に語ってもらい、本コラムのまとめとさせていただきます。

A 先生：私は「英語のプロたれ！」というメッセージを贈りたいと思います。私の「遺言」でもありません(笑)。状況は人によってまちまちですが、これまで新人教育にかかわってきた経験から申しますと、大体3年目くらいから目が回るような忙しさに飲み込まれます。そうこうしているうちに、肝心の英語やその指導に磨きをかける時間がなくなるというのはよくあるパターンです。

といっても、最初はそれまでの「貯金」がありますから、何とか“making both ends meet”でやれましょう。しかしながら仕事量が増すにつれて、英語力の「貯金が底をつく」感じが、やがては訪れると思います。

指導法も同様です。中学校の場合、言語材料に限られるのでルーティーンは作りやすく、一見スムーズな授業マネジメントができていような錯覚にとらわれます。しかし十年一日のごとく、同じ手法で対応できるわけがありません。工夫やチャレンジのないまま、「いつもの繰り返し」を続ければ、この面でも「破綻」が訪れることはこれまた自明です。

本欄では、われわれの勘どころを開陳してきましたが、それすら時代の流れの中で修正を加えるべきものがないとは言いきれません。生徒も毎年のように違うタイプの連中が入ってきます。

プロはそんな現実を踏まえるべきです。それがブ

ロのプロたる所以ではないでしょうか。日々の流れの中でその根本を忘れることがあります。しかし、いわゆる“one of those teachers”にはなっほしくないのです。そのためには、常に英語力を磨き、新たな知見を取り入れ、指導に工夫を加えていく必要があるのです。

C 先生：A先生、まさにその通りです。流れに身をゆだね、“one of those English teachers”になっていった新人を私も数多く見てきました。

A先生のメッセージと少しかぶりますが、私からは“Be a good role model.”というメッセージをお伝えしたいと思います。「先生」ということばの由来はいろいろあるようですが、生徒にとっては読んで字のごとく、人生の、そして学習の“role model”でもあるはず。

教師にとって、“role model”であり続けるというのはとても大切なことです。発音、語彙・表現、文法という英語を形成する骨格部分の知識は言うに及ばず、それらを元にした4技能においても「先を行く人」でないといけません。

若い頃、初めて教室にやって来たALTと私がどのように会話をするかを喰い入るように見つめていた生徒の「熱視線」を忘れません。あのとき生徒は私をsize upしていたのです。

教職を選んだ以上は、プロがプロとして認められてからも、トレーニングの手を緩めることがないように、常にプロ教師は範を示すことをずっと求められるのです。教師自身が学ぶのを止めた瞬間、その人はプロではなくなってしまいます。その信念と姿勢を続けることにこそ、授業マネジメントを成功させる最大の鍵があると思います。

B 先生：お二人のメッセージは英語教師本質論にかかわるものですね。私もどちらかというところ、そうした本質論に近いのですが、授業にも直接かかわるメッセージです。それは、田邊先生がよく言われる「センサーを on にする」ということです。

自戒の念を込めて申しますと、われわれは忙しくなると、生徒のちょっとしたしぐさや動きに対して鈍感になるといいますか、見逃しをしでかしてしまうことがあります。

しかしながら、管理職の立場から新人の先生方を見ておると、忙しいとかどうとかという仕事上の状況以前の問題として、「センサー」という人間の感覚の使い方にすこぶる未熟な新人が増えているような感じがしております。昨今の教員採用試験は、我々の時代とは打って変わって難易度が高くなり、確かにオーラル面を含み、学力面ではすぐれた方々が採用されています。これは頭の痛い発見でもあります。

C 先生：確かに……。私にも思い当たるがあります。「江戸しぐさ」のひとつの「傘かしげ」の話を思い出しました。傘をさした人とすれ違う場合、これではぶつかるなと思ってさりげなく自分の傘を傾けて、通行を円滑にするというあの感覚、これも「センサー」でしょうか。

B 先生：そうそう、それです。相手の心情を察すること。最近では「江戸しぐさ」が道徳の副読本にも採用され、歴史的な根拠に賛否両論があるようですが、それでもお互いを「察し合う」行為は、ある意味、日本文化の「エートス（気風、精神）」にもつながっていると思います。

A 先生：企業が大学の卒業生に一番求めている能力であるコミュニケーション能力というのはそのあたりのことを内包しているのかもしれませんが。「昭和人間」の価値観は古いのですが、昨年入って来た新人の中にも、情報機器は私が恐れ入るほど驚く速さでこなすのですが、人の情を慮おもんばかるといってヒューマンインターフェイスの面では、傘どころか首をかしげるような場面（笑）に遭遇します。

B 先生：英語をやればやるほど、自国文化の価値に目覚め、文化の根底にあるものを re-appreciate する（その価値、重要性に目覚める）ようになるはずで、英語を通してそういう方向へといざなうためには、英語教師自らが「察する文化」の核心部分を体現しうる“role model”になってほしいのです。

C 先生：そうですね。クラスルーム・マネジメントがうまくいくかどうかはそんな教師自身のセンサーの感度にも関係すると思いますよ。

田邊：みなさんの「最後の遺言」をお聞きしながら（笑）、あるエッセイのことを思い出しました。それが『英語青年』（研究者）の編集長も務められた外山滋比古先生（お茶の水大学名誉教授）の「空気の教育」というエッセイです。そこには次のような一文があります：

教育のことを薫陶という。これはまさに空気による育成を意味する、家庭には家風、学校には校風があることを考えてみよう。人間が生活しているところにはやがて、一定の空気、雰囲気が生じる。本当の教育は押し付けや口先だけの注意ではない、子どもを包む家庭や学校の空気こそ、最も深いところに作用する。

これは学校や家庭、全体に漂う空気、雰囲気のことか書いてありますが、この空気は人にもあてはまると思っています。お三人ともそれぞれが独自の空気を醸し出され、それはやがて教室全体を包み、生徒たちの大切な糧になって来たことがよくわかります。授業マネジメントはそんな教師の指導技術や勤どころと相まって形成されるのでしょうか。

若手の先生方、環境に負けないように、ずっと英語を好きでいてください。そして、学び続けてください。英語が大好きで、自らも学び続ける先生がいる限り、空気の教育は続きます。

お三方、長い間、お付き合いいただき、大変ありがとうございました。

【参考文献】外山滋比古（2011）『空気の教育』筑摩書房。



CAN-DOリスト, どう使う?

根岸 雅史 Negishi Masashi
(東京外国語大学)

1. 使われない CAN-DO リスト?

前回の連載では、「TO-DO リスト, WISH リスト, CAN-DO リスト」というタイトルで、真の CAN-DO リストの作り方について書いた。

現状はどうだろうか。文科省の指導もあり、CAN-DO リストはほとんど提出済みという地域もあるが、全体としてはまだだ。文部科学省(2015)における中学校の『CAN-DO リスト』による学習到達目標の設定状況を見ると、平均では 31.2%であるが、都道府県別では 1.7%から 100%までとだいぶ幅がある。

このうち、CAN-DO リストを公表している学校は全体の 5%で、CAN-DO リストに基づき達成状況を把握している学校は 15.3%である。つまり、提出済みであっても、ほとんど「使っていない」というのが現状のようだ。大多数の学校では、公表もしていないし、評価にも使っていないのだ。

文部科学省は、「公表」について、「『学校だより』や『英語科通信』等で紹介したり、学校のホームページに掲載したりなどすることで、生徒、保護者及び地域住民に広く伝えている状態のことを指す。」としている。「国際共通語としての英語力向上のための 5つの提言と具体的施策」の「提言 1. 生徒に求められる英語力について、その達成状況を把握・検証する」には、「中学・高等学校は、学習到達目標を『CAN-DO リスト』の形で設定・公表するとともに、達成状況を把握する。」とされている。CAN-DO リストの公表自体は、設定が終わってれば、印刷して配るか、ホームページに載せるだけのことなので、この達成率が 5%というのは、驚きである。

問題はなぜ公表できないかである。教育委員会から言われて慌てて作って提出はしたものの、何らかの理由で公表するに値しないもの(?)と判断しているのだろう。教育委員会が雛形を示して、それをもとに作った CAN-DO リストであれば、それはどの学校の CAN-DO リストもほとんど同じということもあるだろう。また、教科書会社が一般に公開している CAN-DO リストをほぼそのまま提出しているというケースもあるかもしれない。さらに、どこかで見つけたものをコピーして出しているケースもあると聞く。

「達成状況の把握」については、「テスト等の実施により、学習到達目標の達成状況を客観的に把握している状態を指す。」としている。しかし、こちらについては、設定した CAN-DO リストによる学習到達目標のすべてで行っているのか、一部の技能で行っているだけなのかなどは、明らかになっていない。また、行っているとされる「達成状況の把握」は、いつどのような方法で行われているのかも気になる。

2. CAN-DO リストを指導に活かす

CAN-DO リストは、「設定」・「公表」・「達成状況の把握」が求められているが、せっかく設定したものは、まずは指導に活かしたい。それにはどうしたらよいのだろうか。

まず、CAN-DO リストは、特別などきだけに意識するのではなく、常に意識しておくことが重要だ。具体的には、日常的に CAN-DO リストを見ながら、授業準備をするのだ。その学年の CAN-DO リストは、クリアファイルなどに入れておいてもいいだろう。授業で扱っていないものがないか、クリアファ

イルの CAN-DO リストを時々眺めて、確認するのだ。また、特に意識したい CAN-DO ディスクリプタは、大きめの付箋などに書いて自分の机の本立てにでも貼っておくといひ。

その上で、CAN-DO ディスクリプタのそれぞれを普通の授業で、反復的、継続的に扱うようにすることである。どのようなタスクも一度経験するだけで、そのねらいとなっている力が身についてしまうということはない。何度も何度も繰り返してやることが重要だ。

次に、授業に活かす上で問題なのは、授業に「言語活動」がないということだ。もっとも、現行の中学の学習指導要領では、「言語活動」を下支えするような学習活動が広い意味の言語活動に含まれてしまっている。しかし、ここで重要なのは、「言葉を使って行う行動」という意味での「言語活動」である。つまり、「言葉を使って意味のやりとりをする活動」である。なので基本的には、単に音読をしたり、単語を何度も書いたりという活動自体は、ここで言う「言語活動」ではない。本来の意味での「言語活動」は、教科書にあっては往々にして飛ばされている。NEW CROWN で言えば、USE Speak や USE Write といった活動である。「言語活動」が授業になければ、CAN-DO ディスクリプタの示す学習到達目標の実現につながらないのは当然である。

3. CAN-DO リストを評価に活かす

「CAN-DO リストを評価に活かす」といった場合、まずは CAN-DO リストに基づいた評価の実施（ペーパー・テスト、パフォーマンス・テスト等）を行うことが重要である。CAN-DO リストに4技能の学習到達目標が書かれているのに、「話すこと」の評価そのものがないとか、CAN-DO に対応したテストがなされていないということであれば、それは CAN-DO リストを評価に活かしているとは言えないだろう。

CAN-DO リストを評価に活かす場合、「聞くこと」「読むこと」といった受容技能と「話すこと」「書くこと」といった発表技能は、分けて考える必要があるだろう。受容技能の場合は、理解するテキストがどのようなレベルなのか、また、テキストタイプ

は何なのかなどについての規定が必要である。その上で、CAN-DO ディスクリプタに基づくタスクを作成することになる。それに対して、発表技能の方は、CAN-DO ディスクリプタに基づくタスクを作成した上で、CAN-DO ディスクリプタと整合性のある採点基準を作成し、採点を行う必要がある。

CAN-DO ディスクリプタを、「自立的に（他者の助けを借りずに）、言語学習者・使用者（language learner / user）として、言葉を用いて何ができるか（行動）を記述したもの」と定義するならば、テストは未習のものでなければならない。もし、これが既習のものであれば、本当に力があってできているのか、覚えているからできているのか、わからなくなってしまふ。

また、発表技能であれ受容技能であれ、CAN-DO リスト・言語活動に基づくテストになっているか、という点も重要である。発表技能のテストは、CAN-DO ディスクリプタに書かれた行動をそのままテスト・タスクにすればよいので、比較的作成が容易かもしれない。

それに対して、受容技能の CAN-DO ディスクリプタに書かれた行動は、「理解できる」というようなものだったりするので、テスト・タスクの作成が難しいかもしれない。そのために、リーディングの CAN-DO ディスクリプタが「～を読んで、概要が理解できる」とか「～を読んで、要点が理解できる」となっている、単に詳細を問うような問題のつくりになっているということもよくある。こうした場合の単純な解決策は、多肢選択式のテストにし、問いを「概要はどれか」や「要点はどれか」のような質問にすることである。その上で、こうした読みが前提となって遂行可能となるような、現実生活に近いタスクを作成することができればなおよい。

【参考文献】

- 文部科学省 (2015). 平成 26 年度「英語教育実施状況調査」
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikoku-go/1358566.htm
- 文部科学省初等中等教育局 (2013). 「各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き」
- 外国語能力の向上に関する検討会 (2011). 「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策」
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/23/07/_ics-Files/afieldfile/2011/07/26/1308888_1.pdf

授業レポート CLASS REPORT

生徒の目が輝く！ アクティブ・ラーニングの 考えを取り入れた授業(2) —GETにおける授業の工夫—

枝 迫 香 葉 Edasako Kana (鹿児島県奄美市立名瀬中学校)

1. はじめに

「アクティブ・ラーニング」と聞くと、プレゼンテーションや討論などをイメージし、少し敷居が高いと感じる方もいるかもしれません。しかし、「アクティブ・ラーニング」は特定の授業の型などを意味するものではなく、生徒の能動的な学びにフォーカスした教授・学習法を指します。つまり、授業の様々な場面において、その考えを取り入れ、授業を改善することが可能であるということです。

そこで、今回は、「アクティブ・ラーニングの考えを取り入れたGETの授業」というテーマで実践を行うことにしました。年間の授業の中でくり返されるGETの授業をよりアクティブなものにできれば、次のようなことが期待できると考えたからです。

【GETの授業をアクティブにすることの意義】

- ① 主体的・協働的に学ぶ場面をくり返し経験することで、思考力・判断力・表現力を高めることができる。
- ② ①のようにして高められた力を、単元や学期の最終的なタスク(パフォーマンス課題等)に生かすことができる。

授業の流れや1つ1つの活動は、単純でありふれたものですが、それぞれの活動の中で生徒の思考がよりアクティブに保たれるように工夫しました。今回は、Lesson4 GET Part 2の流れと、それぞれの活動における工夫を合わせて紹介します。

2. GETの授業の流れとワークシート

私の場合、GETの見開き1ページを基本的に2時間で扱うようにしています。そのうち前半の1時間は、新出表現の導入とその活用練習、後半の1時間は、本文の聞き取りや読み取りを中心とした授業

を行います。これらの2時間に対して次のようなワークシートを1枚使用します。

Lesson 4 Enjoy Sushi		Get Part 2		P 1 5	
This is the vegetable garden of our class. We		What's here vegetable garden	野菜園	【聞き取りのポイント】	
class will enjoy cooking and eating them.		"enjoy" "eat" "sushi" take care of... organic	楽しむ 食べる 有機農産物の	① 久美のクラスの生徒が好きなことを2つ書こう！	
教科書の本文		語句		聞き取りのポイント	
【「〜すること」という種の表現】		☆ 「自分の好きなこと」ビンゴをしよう！		eat school lunch	
○ 私はサッカーが好きです。		cook watch TV read books play sports		listen to do my see movies swim	
○ 私はサッカーを覚えるのが(聞こえること)好きです。		walk dance go to AEON play music talk with Megan		new out practice water skis sing songs water cupping	
☆ 「〜ing」のつけ方は「進行形」と同じ、特別な形に注意しよう！		☆ 「友達の良いこと」について英文書いてみよう！			
① そのまま ing をつける play -					
② 最後のeを取って ing をつける see -					
③ 最後のeやoを削って ing をつける swim -					

なお、今回は、2時間の内の前半1時間の詳細について紹介します(ワークシートでは、下段)。

3. 授業の実際

(1) ウォームアップ

授業の初めには、ウォームアップとして、テーマに基づいた簡単な対話活動を行います。今回のテーマは“My favorite ice cream”として、次のように指示しました。

- Exchange greetings first.
- Ask your partner's favorite flavor.
- If he/she likes the same flavor as you, you can get one point.
- When you get three points, please sit down.

“Ready. Go!”の合図で生徒は、一斉に席を立ち、パートナーを替え、対話をくり返します。立っている生徒が少なくなったら、“Which flavor do you like? Oh, you like strawberry. Who likes strawberry? Raise your hand.”などと教師が話して、活動のまとめを行い、本時のタスク「自分の好きなことについて話をしよう」を確認しました。

(2) 新出表現の導入

新出表現の導入では、ウォームアップの活動で用いた“Which ... do you like?”の形を用い、好きなスポーツについて、生徒と次のような流れでインタラクションを行いました。

- ① What sport do you like?
— I like soccer. / I like volleyball.
- ② Which do you like, playing soccer or watching soccer?
— I like watching soccer.
- ③ Which do you like, watching soccer or watching volleyball?
— I like watching volleyball.

今回は、「動名詞」が新出表現でした。そのため、②に対して“1 like watch soccer.”と答える生徒もいましたが、“Oh, you like watching soccer! How about you? Do you like watching soccer?”のように返し、生徒が徐々に気づけるようにインタラクションを行いました。その後、次のように指示しました。

- ・対話の中で気づいたことをペアで話しましょう。
- ・話し合うときは膝を向かい合わせて、終わったら前を向きましょう。

全てのペアが前を向くの待ち、生徒の考えを聞きながら、新出表現である「動名詞」について板書し、確認をしました。

その後、ウォームアップと同じ要領で、“Which do you like doing?”という質問に対し、watching TV, playing sports, reading booksの中から1つ選んで答える活動を行いました。このような活動を通して、新出表現の形・意味・用法を十分に理解させた後、プリントを配付し、板書を書き写させました。

(3) 新出表現の活用練習

新出語句の活用練習として、今回は「自分の好きなことビンゴ」を行いました。具体的には下の表を使い、“What do you like doing?” “I like eat-

cook	watch TV	read books	play sports	eat school lunch
study	listen to music	do my homework	see movies	swim
sleep	run	talk with my friends	play with my friends	fish
clean	draw pictures	write letters	sing songs	learn English
walk	dance	go to AEON	play music	talk with Megan

ing school lunch.”などの対話をしながら、ビンゴを目指します。

活動を行う前に、語句の確認をするため次のような指示をしました。

- ・表中の語句の、発音と意味をペアで確認しましょう。
- ・ペアで話し合っても分からないものは、調べたり先生に質問したりしましょう。
- ・活動は立って行い、終わったら座りましょう。

全てのペアが終わるのを待ち、質問の多かったものや、机間指導の中で気づいたことなどを全体で確認し、その後活動を行わせました。

なお、活動で使用した表の作成には、教科書のWord Cornerや、指導用CD-ROMのtango dataを用い、できるだけ多くの種類の動詞を使用するようにしました。

(4) 本時のまとめ

最後に、本時のまとめとして、活動の内容を英文で書いてまとめさせました。指示は次の通りです。

- ・対話の中でわかった、「友達の好きなこと」について2文以上の英語で書きましょう。
- ・終わったら先生のチェックを受けましょう。
- ・合格したら、まだ終わっていない人のサポートをしましょう。

生徒が書いた英文の中には、次のような誤りが多くありました。

- × Reona like playing sports.
- × Haruna likes write letters.
- × Kotaro likes talking with my friends.

これらの誤りがある場合は、正しい表現を確認した上で、再度、別の友達について書いてくるように指示しました。また、正しく書けた生徒は、「○○君を助けてあげて」などと指示し、サポートをさせました。

最後に、誤りが多かった表現について全体で確認し、授業を終わりました。

4. GETの授業をアクティブにする工夫

以上のように、GETの授業では、実際に対話をしたり英文を書いたりする活動を多く取り入れた授業を展開しました。それらの活動を通して、授業をよりアクティブにするために、次のような工夫をしました。

①活動の始まりと終わりを明確にする

「立って話をし、終わったら座る」、「膝を向かい合わせて話をし、終わったら前を向く」といったように、活動の始まりと終わりがはっきりわかるように指示を出します。このようにすることで、教師は生徒が必要とする時間を見極めることができますし、早く話し合いが終わるペアと、なかなか進まないペアのそれぞれに必要なアドバイスをしたり、その後の指名計画を考えることもできます。

また、生徒同士でも、周囲のペアの様子を確認することができ、「他のペアに遅れないように」「他のペアよりも良い答えを」といったように刺激となります。結果として、活動にメリハリが生まれ、アクティブな授業となります。

②自分たち自身を題材にした活動にする

新出表現の導入として行ったインタラクションでは、“Which do you like, watching soccer or watching volleyball?”という質問に対して、意見が分かれました。興奮した生徒たちからは、「サッカーなんて2時間も見て1点も入らないことがあるでしょう?」「入りそうで入らないところがおもしろいんだ!」といった声が上がりました。残念ながら、これらの意見は日本語で交わされたのですが、生徒がこのことについてもっと話したい、他の人の意見を聞きたいと思える題材を選ぶことがとても大切だということがわかります。その後の活動で「ビンゴ」を選んだのも、「あと“listen to music”がそろえばビンゴだ! 音楽を聴きそうな人は誰だろう?」と考えながらペアを見つけることで、生徒はより積極的に活動に取り組むことができると考えたからです。そのため、ビンゴの表を作る際には、生徒一人ひとりを思い浮かべながら、それぞれに合った選択ができるように留意しました。

③書いてまとめる活動を取り入れる

口頭でのやりとりは、短い時間の中で多くの発話を促し、生徒の集中力が持続する活動です。一方で、意味を伝えることに重点が置かれるため、表現の正確性については曖昧になってしまいがちです。そこで、活動の内容を書いてまとめることが大切になります。それまでは「意味を伝える」ということに思考の重点が置かれていますが、書く活動になった瞬間に、「ここには-ingが必要?」「動詞の-sってど

んなときに付くんだっかな?」と「正しい英文を書く」ことに思考の重点が置かれるようになります。授業の終盤であっても、このように思考のスイッチが行われるような活動を取り入れることで、授業をアクティブにすることができるのです。

また、このような活動では、生徒の理解度によって、活動のスピードにかなりの差が出ます。その際に、早く終わった生徒が、他の生徒をサポートできるように指示すると、教える生徒にとっても、教えられる生徒にとっても、充実した時間を過ごすことが可能となります。

④教師と生徒の発話時間を意識する

授業後に、自身の授業を評価する際には、教師と生徒の発話時間の比率を考えます。例えば、今回の授業では、次のようであったと評価しました。

場面	教師の発話	生徒の発話
(1)ウォームアップ	約2割	約8割
(2)新出表現の導入	約3割	約7割
(3)新出表現の活用練習	約2割	約8割

新出表現の導入場面では、教師の発話が多くなりがちです。しかし、今回は、生徒の発話を増やすことを意識し、インタラクションの中でポイントを捉えさせたり、気づいたことをペアで話し合わせたりすることで、教師の発話を最小限に抑えることができました。このように、毎日の授業の教師と生徒の発話時間を分析することで、アクティブな授業作りに対する教師のモチベーションも高められます。

5. おわりに

現在担当している2年生の生徒とは、1年次よりこのような授業をくり返し行ってきました。今ではすっかり授業のスタイルに慣れ、短い指示でもてきぱきと動けるようになりました。最近、生徒から「英語の授業は忙しい。脳みそに汗をかきそう」と言われました。「50分間、常に生徒の思考をアクティブに保ちたい」と考えている私にとっては、最高のほめ言葉だと感じました。まだまだ分からないことや課題は多くありますが、生徒の脳にもっと汗をかかせられるよう、研究を進めていきたいと思えます。

小学校英語 Just Now

英語表現に触れる頻度を 高めるカリキュラム —モジュール導入 その2 授業と成果

松宮奈賀子 Matsumiya Nagako
(広島大学大学院教育学研究科)
清水由美子 Shimizu Yumiko
(広島県安芸郡海田町立海田小学校)

1. はじめに

海田町は平成26年度より高学年でのモジュール授業を導入しています。前号では、モジュールのカリキュラムと環境整備を紹介しました。本号では、モジュールの授業とその成果を紹介します。

2. モジュールの授業の様子

(1) 単元の構成

モジュール授業を導入するにあたり、今まで行ってきたような時間をかけたコミュニケーション活動も大切にしたいという思いから、単元の最後に45分間のじっくりとコミュニケーションを図る時間を設定し、その活動に向けてモジュール授業で語彙や表現を学習していくという単元構成にしました(図1)。

(2) モジュールA・Bと単元末の活動

モジュールA(20分)では、指導内容として基本的な語彙や表現の慣れ親しみを目標とする活動を設定しました。*Hi, friends!*(文部科学省)のリスニングや様々なチャッツ、カードやICT教材を用いた語彙や表現の練習を行い、コミュニケーションや自己表現に必要な基礎的な表現力を体験的に養っていく活動を行いました。

モジュールB(25分)では、交流活動や発表、コミュニケーションゲーム、アルファベットを書く体験等、モジュールAで学習したことを活用したコミュニケーションや自己表現を主とする活動を行いました。

そして、単元の最後にはじっくりとコミュニケーションを図る時間(45分)を設定し、スピーチやグループでの発表、他学年との交流授業などを行いました。

Dream 5-3 好きなものを伝えよう

<単元計画(5時間【1~4時】8モジュール+ (5時) 1時間)>

時	目標と主な活動	目標	評価規準	評価方法
1	日本語と英語の音の違いに気付く、好きなものを表す表現を知る。 ○好きなものを表す表現を知ろう。 ・[Chant] バナナじゃなくて banana 『バナナじゃなくて banana チャッツ』より ・「先生の好きなものを知ろう」 ・「好きなものを表す言い方を知ろう」 ・キーワードゲーム	○	・日本語と英語の音の違いに気付いている。	行動観察 振り返りカード分析
2	○自分の好きなものを言ってみよう。 ・[Chant] マラソンじゃなくて marathon 『バナナじゃなくて banana チャッツ』より ・[Listen 1] だれが何を好きなのか、線で結ぼう。(p.16) ・「自分の好きなものを言ってみよう」 ・「友だちの好きなものあてゲーム」	○	・自分の好きなものを言っている。	行動観察 振り返りカード分析
3	好きなものを尋ねる表現に慣れ親しみ、好きなものや嫌いなものについて、積極的に伝え合おうとする。	○	・好きなものや嫌いなものについて、積極的に尋ねたり答えたりしている。	行動観察 振り返りカード分析
4	○好きかどうかをたずねる表現に慣れよう。 ・[Chant 2] Do you like apples? (p.16) ・「好きかどうかをたずねる表現を練習しよう」 ・「Who am I?」クイズをしよう。 ○友だちにインタビューしよう。 ・「インタビューの練習をしよう」 ・「友だちにインタビューしよう」 ・「インタビューした内容を紹介しよう」	○	・「Who am I?」クイズをしよう。 ・友だちにインタビューしよう。 ・インタビューした内容を紹介しよう。	行動観察 振り返りカード分析
5	I like ~、などを使って、積極的に自分が好きなものを紹介しようとする。 ○自分が好きなものを Show&Tell で紹介しよう。 ・「わたしの好きなもの(Show&Tell)」	○	・自分が好きなものについて、積極的に紹介している。	行動観察 振り返りカード分析

<第1~4時>

モジュールA(20分) <語彙・文の練習>

- ・カードやICT教材を用いた語彙や表現の練習
- ・チャッツ ・リスニング ・文化の紹介
- ・先生との応答 ・ペア練習 など

モジュールB(25分) <簡単な表現活動>

- ・友達との交流活動 ・短い発表 ・表現の練習
- ・コミュニケーションゲーム
- ・インタビュー活動 ・書く体験活動 など

<第5時(単元の最後)>

じっくりとコミュニケーションを図る時間

- (45分) <表現・交流・コミュニケーション>
- ・グループ発表 ・スピーチ ・Show & Tell
 - ・下学年とのクイズ大会、英語お楽しみ会 など

図1 5年生 Dream 5-3 単元計画表(抜粋)

3. ふり返りカードの工夫

平成25年度までは毎時間児童の自由記述によるふり返りを行っていましたが、時間がかかる一方で、児童が自由に感想を書くため、めあての到達を十分に見とれないという課題がありました。そこで、めあてとそれに対応するふり返りの視点を設定した1単元1シートの「ふり返りカード」を作成、活用しました(図2)。ABを通してめあてに対して自分どのように活動したかを、Grade A～Grade Dまでの到達度を示し、モジュールBの時間に自己評価するものとししました。単元の最後には、3つの観点別目標(「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」「外国語への慣れ親しみ」「言語や文化に関する気づき」)に対するふり返りを◎○△×で自己評価し、児童の言葉でのふり返りもできるよう、自由記述の欄を設けました。

外国語活動 ふり返りカード		6年 組 番 名前 _____
Dream 6-5 友だちを旅行にさそおう		
①	A 月 日 B 月 日	
めあて	いろいろな国について知ろう。 いろいろな国について説明しよう。	
ふり返り <small>(得意なところを○でつけよう)</small>	Grade A	世界の国の名前や、その国の特徴などに いろいろな国について説明することができた。
	Grade B	世界の国の名前や、その国の特徴などに 説明することができた。
	Grade C	世界の国の名前や、その国の特徴などに 説明することができた。
	Grade D	世界の国の名前や、その国の特徴などに 説明することができなかった。
②	A 月 日 B 月 日	
めあて	行きたい国について尋ねたり言ったりする表現を知ろう。 行きたい国について尋ねたり言ったりしよう。	
ふり返り	行きたい国について尋ねたり言ったりする表現が よく分かった。	
④	月 日	
めあて	おすすめのツアーを紹介しよう。	
ふり返り <small>(得意なところを○でつけよう)</small>	Grade A	自分の思いがはっきり伝わるように工夫して、おすすめの国について発表することができた。
	Grade B	自分の思いがはっきり伝わるように工夫して、おすすめの国について発表することができた。
	Grade C	自分の思いがはっきり伝わるように工夫して、おすすめの国について発表することができた。
	Grade D	おすすめの国について発表することが できなかった。
Dream 6-5 をふり返って (◎ ○ △ × で自己評価しよう)		
自分の思いがはっきり伝わるように工夫して、おすすめの国について発表したり聞いたりした。		
行きたい国について尋ねたり言ったりする表現に慣れた。		
世界には様々な人たちが様々な生活をしていることに気付いた。		
活動を通して気づいたことや感想、友だちや自分のよかったところ		

図2 6年生 Dream 6-5 ふり返りカード(抜粋)

4. モジュールによるカリキュラム改善の成果

前号で紹介したように、平成25年度終了時点での外国語活動の評価の3観点に対する児童の自信の自己評価を調査したところ、「慣れ親しみ」への肯定的評価が他の2観点より低い結果でした(表

1)。しかし、モジュール導入後の平成26年度終了時点では、9割を超す児童が課題であった「慣れ親しみ」を含め、3観点全てで肯定的評価をしていました(表2)。

表1 平成25年度終了時点の児童の自己評価

肯定的評価をした児童(%)	
第5学年	
コミュ	87.1
慣れ親しみ	71.8
気付き	84.4

表2 平成26年度終了時点の児童の自己評価

肯定的評価をした児童(%)		
	第5学年	第6学年
コミュ	94.8	95.4
慣れ親しみ	93.2	94.1
気付き	98.1	96.0

※コミュ：コミュニケーションへの関心・意欲・態度
慣れ親しみ：外国語への慣れ親しみ
気付き：言語や文化に関する気付き

また、モジュールの導入により、指導者が効率的な指導、評価をより意識するようになり、「英語を通じて」テンポのよい授業をすることへの意識が高まったことも大きな成果でした。

さらに、評価において、ふり返りカードで3観点の到達状況を児童が自己評価する項目を設けたことで、指導者が3観点の見とりをきちんとできるようになったという変容も見られました。

5. 今後の課題

JALT(日本人専科指導員)の先生はAll Englishで授業を進めていますが、T1の学級担任については、英語使用量の個人差が大きい実態があります。研修を通して英語指導力の向上を目指すことが現在の課題となっています。

また、モジュールでは授業時間が短く、休憩時間なしで他教科と切り替わることとなります。そのため、意識の切り替えが難しい側面もあります。20分外国語活動+25分他教科という組み合わせだけでなく、20分外国語+(25分+45分)の他教科など、組み合わせる授業が細切れにならない工夫をするなど、進めやすいモジュールの在り方を探ることも今後の課題です。

平成 28・29 年度 中学校英語 文法事項・語彙 移行措置資料

●中学校英語教科書 供給形態について

1. 供給形態

平成 28 年度から教科書の採択が変わる場合、教科書の配布は学年進行 (図 1) となります。

(図 1) 学年進行

	H27	H28	H29	H30
1年	24A社	28B社	28B社	28B社
2年	24A社	28A社	28B社	28B社
3年	24A社	28A社	28A社	28B社

2. 24NC → 28NC の移行措置

平成 24 年度版 *NEW CROWN* (以下 24NC) か

ら、平成 28 年度版 *NEW CROWN* (以下 28NC) への移行措置が必要となるのは、平成 28 年度の新 2, 3 年生、および平成 29 年度の新 3 年生です (図 2)。それぞれの学年に必要な「文法事項」と「語彙」の移行措置を以下に示しました。

(図 2) 24NC → 28NC の移行措置

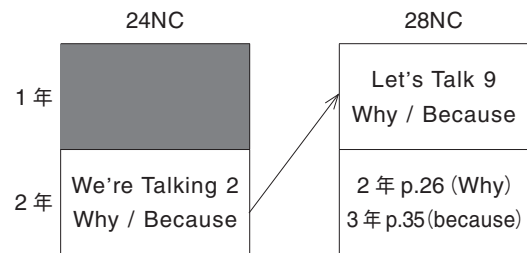
平成27年度		平成28年度		平成29年度	
1年	24NC	1年	28NC/他社	1年	28NC/他社
2年	24NC	2年	28NC	2年	28NC/他社
3年	24NC	3年	28NC	3年	28NC

●文法事項の移行措置について

3 年間で全ての文法事項を履修できるように、移行措置が必要になる場合があります。

28NC で学習するにあたり、未習となる注意すべき文法事項は、Why / Because です。小学校の外国語活動ですでに、Why / Because の表現には多分にふれており、自己表現活動で使う表現の幅を広げるため、2 年生から 1 年生へと移行しました。平成 28 年度に新 2, 3 年生になる学年については、28NC の Book 2, p.26, Book 3, p.35 でそれぞれ why と because が扱われています。

≪ Why / Because の移行 ≫



●語彙の移行措置について

平成 28 年度の新 2 年生および新 3 年生は、教科書改訂により、文法事項同様、語彙の履修についても配慮が必要です。*NEW CROWN* のウェブサイトにも、語彙の学習についての移行をスムーズに進めるための語彙リスト、単語のワークシートも掲載しています。

☞ <http://tb.sanseido.co.jp/english/newcrown>

ます。平成 28 年度に新 2 年生になる学年 (24NC1 → 28NC2, 3 を使用する学年) には、平成 29 年度に新 3 年生になる際に使用できるリストも用意しました。

③ 28NC は、24NC と同様に、コーパスをもとにした語彙のランク付けを行い、最重要語 (600 語) と重要語 (600 語程度) を設定しています。教科書の Words 欄に示されているように、主に最重要語を太字 (words) で、重要語を通常フォント (words) で示しています。

④ 表中の略号は、下記の通りです。

L = Lesson

LT = Let's Talk

LR = Let's Read

≪ウェブサイトの語彙リストの見方≫

- 28NC では既習扱いになっていても、移行の学年には未習となる語彙を、単元・ページごとに示しています。
- 表の上の見出しは、対象となる学年を示してい